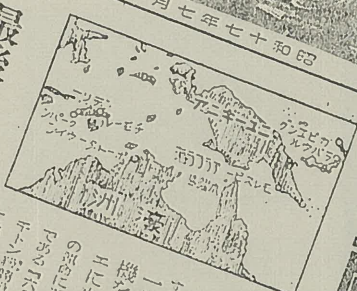




海鷲、モレスビー
敵三十八機を連爆
撃墜破果計實に一八七機



最後の據點攻撃
浙贛線の南部隊攻撃

米英剿滅こそ事變解決の途 帝國今や戦略攻勢へ一轉

東太平洋作戦はその烽火

長部道報軍海
談佐大軍貴川小

私の戦争体験

【第21集】夏の班長会・班会 平和学習資料

子どもたちの明るい未来のために語り継ぎます

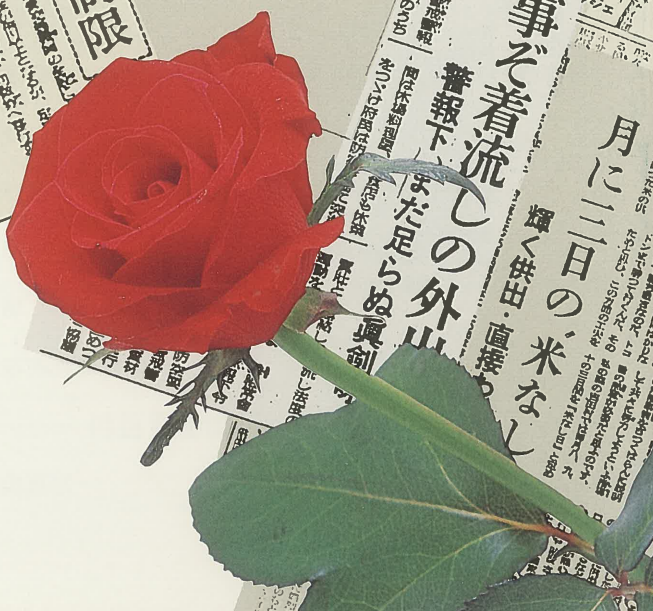
米英支那を攻撃す
平和学習資料
放ふへかど

氣を弛めるな
あつた日離へ重ねし警告

お國へ返上
「一機一機」が返す赤心

市民の足に制限
閑散路線も廢止

何事ぞ着流しの外出
月二三日の米なし



あーっ、また今日も空襲や

泉大津市 根来美代子

昭和六年に満州事変が勃発し、昭和十二年にはシナ事変が勃発しました。上条小学校は林間学校が中止になりました。その後、昭和十六年十二月八日に大東亜戦争が始まりました。私はその頃、堺の宿院にある川崎屋商店という大きな乾物屋に勤めていました。男は皆、戦争に徴兵されたので店は女ばかりで切り盛りしていました。大きな表戸が二十四枚あり、早く行って戸を開けるのが私の日課で、その戸が重くてしんどかったのを覚えています。

十二月八日も、いつものように出勤しようと電車に乗り、龍神駅（現南海堺駅）で電車を降りたところ、ホームは真暗に電気が消され、駅も真暗、あたり一面真暗で「何でやる？ くないしたんやろ？」と不思議に思いました。それで家に帰ってからラジオと夕刊で大東亜戦争が始まった事を知り、「なるほど」と納得しました。ただその頃はまだ空襲もなく、特別生活に変化はありませんでした。

昭和十八年頃から物が配給制になり、砂糖、米、切り干し大根、医薬品等ほとんどの物が配給でしか手に入らなくなりました。急激に食べ物がなくなり、みんな貧しくなっていました。男が組になって大八車に配給品を乗せ、女がキップと物を交換して回りました。又、家にある金だらいや鉄なべ、やかん等金物はみんな国に出しました。お寺の鐘も没収されました。女は着物をつぶしてモンペを縫い、派手な格好はダメだと言われました。パーマはもちろんだめで、化粧品はどこにも売ってなく、手に入れる事ができませんでした。

そして昭和二十年、堺が大空襲に遭い、びっくりした私は、店がどうなったか心配で心配で家（助松村）から堺まで一時間半かかって国道沿いを歩き、

見に行きました。国道（旧二十六号線）はリュックサックを背負い、知り合いを求めて歩く人が南に向かって数珠つなぎになっていました。さて堺に着きました。家も電柱もまだ燃えくすぶっており、熱くて熱くて歩けません。周囲はどこに道があったのかもわからず、とにかくあたり一面真黒に焼け焦げており、街の面影はありませんでした。又、人もおさるのように手足をぎゅっと握りしめ、体を小さく丸めて焼け縮こまった人、真黒な人がいっぱい、男か女かわからない、大人か子供かわからない人がごろごろと転がっていました。川崎商店の大浜の旦那さんも家族と阪堺線（大浜〜宿院間）の高架下には逃げられましたが、間に合わず家族みんな亡くなりました。その高架下には焼けた手形がべったりとくっついていていたという事です。又、死んでも葬式も出せず、線路の上で枕木を集め、家族みんな茶毘に付したという事を聞きました。

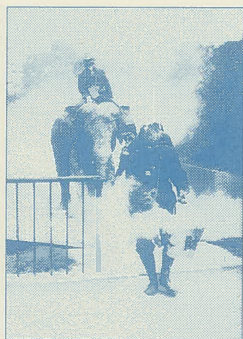
それから、堺の川という川は、熱くてたまらず飛び込んだ人の死がいばかりぶかり浮かんでいました。空襲から何日経っても毎日死がい、どこからともなく流されて来、ぶかぶかと浮かび上がって来るのです。「あー又今日もや」あたりは悪臭ですごい臭いが立ちこもっていました。上条小学校の前にも爆弾が落ちました。当時は上条小学校の周りは田んぼばかりだったので、亡くなった人はいなかったのですが、田んぼに大きな大きな穴が空きました。又、小学校の前に積んであったわらが燃え上がりたいへんでしたが、丁度、上条小学校は夏休みで兵隊さんの宿舎になっていたので、兵隊さん達が消し止めました。森町や浜の方にも焼夷弾が落とされました。助松神社も、社は無事でしたが境内の木々は焼けました。終戦後も誤って焼夷弾に触れ、指を落とした人が三人います。

私の家は助松村にありました。父は、百姓があったので徴兵は免除されていました。父親は自警団に入り、隣組の世話役をしていました。空襲警報が鳴ると近所の人に知らせ「早く防空壕へ逃げて下さい」と一軒一軒回るので、私の家も、中庭に防空壕を掘っていました。空襲警報が発令されると、私達は部屋の電気を消し、防空壕に逃げました。始めは家族みんなで逃げていたのですが、病気がちの祖父はだんだん逃げなくなりました。「もうええ、



戦意高揚に
利用された動物

動物園の飼育動物数の増加は、戦利品として持ちかえたものもありました。一九三六年、京都市動物園にアカグマ、トナカイ、ラクダ、ノロなどが到着。これは中国戦線から第十六師団が略奪同然に持ち帰った動物たちでした。戦利品の鳥獣は、陸軍が皇室へ献上し、それが動物園に下賜されるというケースもありました。日中戦争の始まった一九三七〜一九四〇年ごろまで手柄をたてた軍馬・軍用犬・軍用鳩などが動物園行事に参加し戦意高揚に使われていました。



一九三七年中国蘆溝橋、十二月南京占領と戦火が拡大、上野動物園では緊急猛獣脱出演習の訓練を実施。空襲に備える火たきやバケツの訓練を市民に強制、ゾウやチンパンジー、犬などに防毒マスクを着け、国民の戦意高揚がはかられました。

畳の上で死なせてくれ」と言っただけの中には入らなくなりました。食べ物もなく、好きな物も食べさせてやれず、好きな事もさせてやれず……。七十歳で終戦を待たずして亡くなった祖父の事が一番心残りです。

その頃、招集令状が来た人は近所みんなで助松神社にお参りに行き、高石の駅まで、見送りに行きました。家族の人は「千人針」を集めるため、街頭に立って大変でした。千人針とは、半幅に折ったさらに赤い糸で結び目を千人に千個結んでもらうのです。ただし一人一個しか結んでもらえないので、千人の人に頼まなければならず、何日も何日もかかりました。「五黄の虎年」の人は自分の年の数だけ結べるという言い伝えがあり、その人を探し出して：「五黄の虎年」の人はあっちでもこっちでも引っぱりだこでした。「千人針のさらしを巻いておくと玉に当たらない」というおまじないだったので。私達若い女は「愛国婦人会」というのが作られ、信太山の駐屯地に行かされました。割烹着を着て兵隊さんの服のボタン付けや繕い物をしました。又、洗濯や掃除もしました。慰問袋も送りました。外地の兵隊さんに送るため、お菓子や下着等を袋に詰めたのです。又、空襲に備え、バケツリレーの練習もしました。家の前には必ず水槽を置く事が義務付けられていました。

そのうち、勝つと信じていた戦争は終わりました。進駐軍はぞろぞろと国道を通りました。それがとても怖く、女の子は顔に墨を塗らなと連れて行かれると言ひ、顔じゅう真黒に墨を塗りました。又、通って来るのを見ると慌てて電柱の陰に隠れました。ただ、日本が中国にしたような事は無かったと思います。実際に悪い事をされたという事は聞いていません。ただ、コールガール、パンパンと言われる人は増え、アメリカ兵と結婚した人はいます。戦争は終わりましたが、この戦争により何十万、何百万もの人々が亡くなりました。家は焼ける……。熱く外に飛び出すと空から焼夷弾が雨、あらゆるように降って来る……。人々は逃げ場を失い次々に焼け焦げていきました。「勝つと信じていた戦争」「欲しがりません勝つまでは」ずっと言われ続けてきたこの言葉は何だったのでしょうか。戦争は何も残りません。人も家も街も：みんななくなります。又、何の補償もありません。こんな戦争は二度と再び起こして欲しくありません。いえ起こしてはなりません。

空腹に耐えられず脱走

堺市 平山 良雄

「銃後の守り」この言葉も、もはや死語となった！

昭和二十年春四月、国民学校三年生。大東亜戦争も愈々敗戦の色濃くなり、連日連夜のB29爆撃機の飛来激しく、先月も大阪市内の空襲があった。

平和時の今なら春四月、桜花爛漫、五月の連休と、個々に楽しい思いを馳せ、海に、山に、海外旅行に。消費を謳歌するなど言語同断と国賊扱いされる厳しい戦時下であったので、「銃後を守る」国民全てが「欲しがりません勝つまでは」を時の軍政府が提唱したのを合言葉に、窮乏生活余儀なくされ、じっと耐え忍んだものでした。

戦火も激しくなり、今年から三年生以上は両親・家族の元を離れ、市内から郊外へ集団疎開を強制され、郊外の学校での間借り生活。食糧不足に輪をかけ、くる日もくる日も防空壕掘りに明け暮れる毎日だった。

五月・六月・七月と月日が経てば、集団生活もそれなりに慣れてくるものですが、如何せん空腹には耐えられず、ついに級友三人（二人は落後）と集団脱走を決行。食後、日照時間の長い夏の夕暮れ、夜のとほりを待ち示し合わせた秘密の堀の穴を潜り外に出た。そこは食糧増産の為に植えられたサツマイモ畑だった。土の中に手を入れると大きな芋が……。行き掛けの駄賃とポケットに二つ、三つ失敬した。当時どの家でも玄関横に敵機の空襲に備え防水用水があった。土の付いた芋を洗うには恵みの雨ならぬ？ 恵みの水！ 勿論、素早く洗ったの言うまでもない。

「灯下管制」家の中の明かりが外に漏れると、空爆の的になり易いとのお達しで、唯でさえ暗い夜道が尚暗く、九歳の少年三人がそれぞれわが家に向かって歩く様は他人目には、恐らく奇異に感じられたらう。脱走がばれて

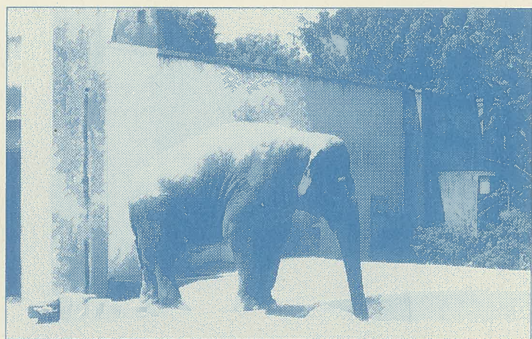


モノ言わない戦争犠牲者

一九四一年八月十一日、東部軍司令部の要請をうけた上野動物園は「動物園非常処置要綱」を作成。

一九四三年八月十六日「猛獣類」処分命令が東京都長官によって発せられました。「諸般の情勢を考え合わせると、この際……」毒物を用いて八月三十一日までに処分すること。犠牲第一号は二頭のクマ、飼育係から「殺し係」となった職員が悲しみのうちにふかしたイモへ硝酸ストリキニネを入れ毒殺します。

毒入りのエサを食べなかったゾウの花子は絶食十八日目、トンキも絶食三十日目に餓死をしています。童話「かわいそうなぞう」"としてトンキも死んだ"に詳しく紹介されています。天王寺動物園も一九四三年九月から翌三月にかけて処分。メスのヒョウだけは毒入りの肉を何度与えても食べずに、絶食させ弱くなったのをロープで絞殺しました。



はいないだろうか？ 運悪く警察官にでも見つければ、どんな酷い目に……と思うと、とんでもない事を仕出かした……と今更後戻りは出来ない。逃亡者の心理が九歳の子供に理解出来る訳がない。見覚えのある電車道、あの角の大きな家を右に回り、八花館（芝居小屋）を左に回れば……両親の元を離れる朝、家の前で行くのが嫌だと母親を困らしたのを思い出した私の目には涙が一杯だった。

町並みは真っ暗だったが、やはり暑い夏の夜、涼を求めてか玄関の戸が少し開いていた。ためらう事なくガラガラと開け中に入ると、黒布で囲った電灯の下で縫い物をして居た母が、メガネ越しに私の顔を見ると同時に私の名を呼んでくれたんだろうと思うが、ワァーと大きな声で泣く私を宥めるのが精一杯だったのでしよう！ 久しぶりに母の膝で泣いた七月九日の夜も遅い十時頃だったでしょうか。運が悪いと云うのか、時間的にどれぐらい経過したか警戒警報のサイレンが鳴り、やがて空襲警報に変わり、忘れもしないあの忌まわしいB29爆撃機による焼夷弾の投下により、旧堺市内は紅蓮の炎の増埒と化したのです。

突然の夜の闖入者。サスガわが母、全ての事情を察したか、行水の替わりに汗と埃で汚れた私の体を手拭で拭いてくれたお陰でか、熟睡した時の警戒警報から空襲警報となり、眠い目を擦りながらわが家の防空壕へ避難した。そこは蒸し暑い湿気の高いロウソクの灯りだけの薄暗い灯の向こう側に見る、父親の顔、兄・姉の顔……成人した私であれば「ヤァーひさしぶり」ぐらいの挨拶はしただろうが、ヒョットして、すごく叱られるのではないかと、オドオドした私の格好は寧ろ滑稽だったかも？ でも？ 父親の一言、どうした、いつ帰って来たんや？ 私は返す言葉もなく母の顔を見上げると、庇うかのように母の手が私の肩に強く感じた。「逃げて帰ってきたんやァー」と母親の助言「そうか」と父親の返事、その後、短い時間であったが重苦しい沈黙が続いた。

その時、空襲警報解除のサイレンが沈黙を破った。いつもの様に空襲警報解除を確認するとヤレヤレと床に入り直すのが恒例だったが、この日に限り警戒警報解除のサイレンが鳴らず、今日はすごく遅いなァーと思った。時計

はもう既に七月十日だっただろうか。家の表の方からだろうか騒がしい人の声、暗闇の筈が少し赤い感じもした。誰か表通りで「火事や、火事やでァー」と怒鳴っているのが聞こえる、間違いない。またしても母親に起こされ、眠気半分、頭には防空頭巾を付け防空壕へ避難しようとして裏に出ると、空は既に真っ赤だった。そうして私は大変な事が起こったと思った。表に出ると、そこは火の海、何があるんだか解らないまま母に手を引かれ、海岸の方に向っていた。火の海はだんだんと広がり、後から追っかけてくる様な気もした。逃げ惑う町角で全身火だるまになって、苦しみ悶えるモンペ姿の方の姿も見た。これが戦争の悲惨な姿の一面なのかもしれない。

そうして八月十五日、私達は御音放送により、日本の敗戦を知った。私達は、今現在平和に慣れ、又、平和に飽きる昨今、真の平和とは多くの犠牲の上に築かれた事を、次世代に、責任を持って伝えて行く義務があるのではないのでしょうか。

「大阪空襲」と十四歳の私

和泉市 小川 和治

五十四年前の三月十三日から十四日までの第一次「大阪大空襲」で、アメリカの飛行機、「B29」二七四機が真夜中に大阪市内の西区を中心に来襲して、「焼夷弾」を木津川、安治川周辺の行政区に投下した。今も忘れられない出来事だった。大正区南恩加島国民学校を卒業した日だった。次の日、今の西区千代崎橋を中心に家々が焼かれ、本田一丁目までの市電の通りに、「焼け死体」が並べてあるのを歩いて見に行った。水ぶくれした死体、丸こげになった死体、丸裸の女の人の死体とその時の光景は今でも目の底に残っている。今の大阪ドーム前から千代崎橋、松島公園を通って本田までの距離にびっしりと死体が並べてあった。



軍隊の予備校になった
中学の軍事教練

一九四三年（昭和十八）ごろ、戦局が日本に不利になる頃、どの大学も専門学校も、中学校も、陸海軍の補助機関、または軍隊の予備校とかわからない性格を持ち始めた。どの学校でも軍事教練に力を入れる。四十キロから五十キロの夜間行軍、中学三年以上は、数日間の夜営も行われた。



三八式歩兵銃で射撃訓練を行う
旧制豊中中学生たち

六月十日、第二次「大阪大空襲」。大正区の工場地帯にあった我が家が近所の家々と共に、四五八機のB29来襲によって戦災を受けた。その時、僕は入学した旧制市岡中学校の地下室に避難していた。真昼時でも戦災のため真っ暗になった電車を道、市岡元町から境川を通って大正橋まで歩き、大正区を見ると、まだ道の両側の家が燃えていた。その中を熱い思いをして家にたどり着いた。焼跡には水道管だけが残っていて、本やアルバムがまだくすぶっているのを見た。近所の友達がお母さんがいないと泣いていた。私も一緒に泣いて「お母さん」と叫びながら泣いた。隣組の防空壕に二十人入っていたのに、焼夷弾で十六人も死亡した。僕の母は幸いに助かったが、友達のお母さんは死体になって見つかった。防空壕の土を掘っていくと、出口へ向かって丸こげになった人、蒸し焼きになった人と次から次へと出て来た。今でも眼底に焼きついている。

家を焼け出された私たちは、南恩加島国民学校で一週間過ごした。ついこの間まで通っていた講堂に次から次へと死体が運び込まれた。赤ん坊を抱いて、乳を飲ませている所で死んだ人、赤ん坊はまだ生きていたかのように乳ぶさにしゃぶりついていた。そのお母さんの下半身は焼け死体だった。夜中に便所に行く時、梅雨どきであったので死体に雨が当たってリンが出ている所を見た。

母の実家のある鳴門へ帰る船便で、尻無川から夜航で大阪湾を横切る時、神戸の町が戦災で焼けている光景を見た。今でも大阪湾を航海する度に思い出す。

その後、八月十五日、田舎の役場の広場へラジオ放送を聞きに行った。天皇が雑音混じりの中、何か言っていた。横に座っていた母が「戦争が終わった」とつぶやいた。私は何だか、張りつめた気持ちが崩れていく思いがした。母から戦地に行っている父がやがて帰ってくると聞かされて、嬉しく思ったものである。

私の十四歳から十五歳の悲惨な出来事が、その後、大人になって、戦争を憎み、平和を求める運動に立ち上がる原動力になった。「教え子を再び戦場に送るな」の考えで四十三年間の教員時代。生徒たちに、八回にわたって

「大阪大空襲」を話してきた。退職してからも和泉市内の小学校、中学校で子どもたちに話す機会を得ている。

日本国憲法が施行されて五十三年目。「戦争法案」をめぐる危険な状況が生まれている。「大阪大空襲」の「語り部」としての役割りをこれから果たして行きたい。

戦争は誰をも狂わせる

東大阪市 羽生田克巳

昭和二十年八月十五日正午、私たち平壤公立第一中等学校の生徒は炎天下の校庭で直立不動で玉音放送を聞かされた。雑音も多く、中学一年の私には何のことも判らなかつた。家に帰ると父と母が言い争っていた。母は「結局、日本が負けたんでしょ」といい、父は「いやア、これからは決戦ですよ。日本が負けるはずないじゃないか」というのだ。

この日から一カ月程だったと思うが、ソ連軍の第一線部隊が平壤の街に入ってきた。まもなく噂の通り、ソ連兵による略奪が始まった。私たちの航空廠官舎にも汚れたルパシカに長靴、肩には「マンドリン」と呼んだ円盤型の弾倉のついた自動連発銃をかついだ荒くれ男たちが二、三人で連れだつてやって来た。入れかわり立ちかわり毎日やって来た。「ダワイ！ダワイ」とどなり、戸を叩き、足でけり、開けると泥靴で上り込んで来て、押入れやタンスを開けさせ、一方でトランクなど引っぱり出し、それにつめて奪って行く。又、別のグループが来て「チャスイ、ダワイ」（時計を出せ）と毛むくじやらの手首に何本もはめた腕時計を見せておどす。これが何回もくり返される毎日だった。

真夜中、自動車のタイヤのきしむ音に目を覚すと「ダワイ！ダワイ！」の声、玄関の戸を蹴る音。息をひそめていると「バリ、バリ、バキーン、バ



海に散った五六人
海軍特攻隊・徳島白菊隊

戦争末期の四月、紀伊水道に面した徳島航空隊の広場に二五〇人全員が集められ、「特攻隊を命ず」と言いわたされた。練習機「白菊」は、時速一六〇キロで燃料も四八〇リットル、五〇キロ爆弾を積み出撃。敵に見つかることよりもないのて、夜間に波の上を高度百メートルで飛んで行った。隊員の中には十六歳八カ月の少年兵も…、隊長は二五歳という若さだった。



中学校のすべてに、陸軍から〈配属将校〉が派遣されて、校長の隣に常駐し、教訓や学校運営にも口を出した。

キューン」と自動小銃を軒先へぶっばなす。母がたまりかねて戸を開けると蒙古系らしいのと目の青いのとの二人組で上りこみ家中を物色、残っていた父の商売道具だったミシン二台をジープに積み込み、また戻ってタンスの抽出しを次々とかきまわし、忘れられていた嫁ついで姉の腕時計を見つけて出した。青い目の兵隊が「チャスイ、チャスイ」と父に向けてどなり、押入れから引っぱり出した大きな茶箱の前に立たせ、母にも立てとうながし「ヤスイ！ダワイ！ダワイ！」と叫ぶ。「まだ他にもあるだろう」というのだろうか。ピストルを父の胸へ向けた。「時計が一つもなくしては困ると、父は懐中時計を油紙に包み、火鉢の灰の中に埋めていた。「本当に撃つかも知れん、あれ（懐中時計）出そうか」と小声で兄がささやいたが、私はおさえられた虫が仮死状態になったように、恐ろしさに思考は止ったまま、声も出なかった。突然、一歳の妹が泣き声を上げた。もう一人のソ連兵が悲鳴に似た声で何か云うと、二人はあたふたと出て行った。子どもの泣き声は彼らにも余程つらかったのだろうか。

その後ひと月も経たぬ間に「一時間以内に立退け」とのソ連軍の命令で官舎を追われ、同じ平壤市内の親せきに身を寄せた。この頃から戦火をくぐり抜けて来たらしい荒々しい部隊が、服装もそれなりに整った部隊と入れかわり、平壤の街もようやく落付きをとり戻した。

明けて昭和二十一年八月十六日の夜明前、まる一年経っても日本送還の目途もつかぬ状況に見切りをつけ、私たち一家は闇ルートでチャーターしたソ連軍の十輪トラックに他の数家族と共に乗り込んだ。日本内地へむけての朝鮮脱出の始まりだった。一回の小休止だけで、車で揺られ続けて、その日の日没の頃、四辺里という村の川原に降された。そのまま近くの橋の下で野宿翌日、夜明前に出発、途中から雨、日暮れまで歩いて村の公会堂に泊めてもらえ、三日目には北朝鮮のあちこちから、南朝鮮へ三十八度線をめざす幾つもの群に出会った。妹をおおい、病身の母を支える父と一家の全財産のリュックサックを一つずつ兄と私で背負い、田んぼの水で乾きをうるおし、乾パンと金平糖をかじりながら、この日は眠りながら兄と肩を組んで歩いた。

この日の夕方、十四、五人の私たちの隊列に何とかな、よろよろとついて来

ていた老婆がとうとう力つきて、道ばたにうずくまってしまった。隊列はとまり、私も兄も母も道ばたにしゃがみ込んでとうとうとした。突然、「あー」とも「うー」ともつかぬうめき声に我に返った。さっきの老婆が一米ほどの小川をへだてた林の松の木の下に、寄りかかるように坐らされ、手を前に組んで頭をガクンと落としている。「おばあちゃん、許して、かんにんしてえ」と泣きじゃくり、手を合わす女の子を抱いた中年の婦人。父は妹を背に私たちの方を見て涙をぼろぼろこぼしていた。

その老婆を残し、どのようにそこを出立したのかも、茶色の和服だった老婆の顔も思い出すことはできない。三十八度線の山を越え、真暗な山道を下りながら、開城の街明かりがキラキラと光るのを見た時のシーンまでは、記憶の糸は切れてしまっている。

開城の難民収容所で一カ月余、引揚船で博多湾内で半月近く、いずれも検疫のため足止めされ、昭和二十二年十月中ば、私たち一家も故国の土を踏むことができた。

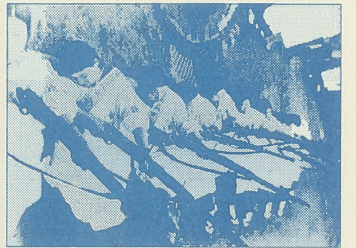
赤ん坊の泣き声にあたふたと出て行ったソ連兵、老婆を置き去りにした中年の婦人、私をふくむその隊列の十数人、みんなを狂わせたのも戦争だ。毎年の平和行進を私はこんな思いで歩いている。

目の前で死にゆく人々

松山市在住 福見ハギノ

昭和十七、八年頃から戦争が序々に激しくなり、あちらの家、こちらの家にも赤紙が来る様になりました。その赤紙を受け取った人は「お国の為だ」と、パンザイ、パンザイの声に送られて出征して行きました。

その頃『国防婦人会』というのが出来、出征して行かれる人を見送りしました。私共も赤紙が来る事を覚悟はしておりましたが、検査の結果、主人は体



女性一九三〇万人の大日本婦人会

十五年戦争で死の苦しみを味わったのは、出征兵士だけではない。娘たち、母親たち、嫁たち、日本の女性のすべてに、言葉には表せない苦しみがあった。

健康な男性のほとんどが出征、または軍需工場へ徴用されたため空襲に備えての町の守りも、農村での生産も、その多くを女性がになっていった。ときに、全女性人口の過半数一、九三〇万人を組織し、監督したのが大日本婦人会だった。

「皇国のために御奉公」する女性の会は、出征兵士の見送り、遺骨の出迎え、竹槍訓練、防空演習、勤労奉仕、千人針や慰問袋の製作、神社の参拝や清掃、「神国」思想の宣伝などをこなしていた。

一九四四年七月、いよいよ本土決戦が近づくと、軍部は在郷軍人数六三九万人の上に、総勢一五〇万の大兵力増強の方針を打ち出した。この頃から、工場労働者の不足はいよいよ深刻になり政府は、未婚女性の徹底的な徴用に踏み切った。



が弱く、「在郷軍人」という事で、女・子供を守るといふ事になりました。昔、主人の職業は菓子製造業でしたが、戦争が激しくなり、砂糖の使用が出来なくなり、その為その仕事を辞めねばならなくなって、内務所と言う所に勤める様になりました。そして私も、子供を隣に住む伯母に預けて、下関の砂糖を扱う港運会社で、大・小の船から倉庫の中に入荷する砂糖の量を調べる役目の仕事をしておりました。

海上では、大きな軍艦が沢山の海兵隊を乗せて出港していく途中、米国の機雷に当たり、見る見る内にその軍艦は沈んでいきました。その沈んでいく様子は：船から出ているマットの先まで逃げまどう人達で黒だかりになり、次第に海の中へと沈んでいくのです。そういう光景を毎日目の当たりにして涙しておりました。

戦争はますます激しくなり、食べる物も次第になくなり、配給から頂けるのは脱しゅ（大豆の絞り滓）とさつま芋。それらで腹を満たしておりました。そんな物を食べている内に主人は体を悪くして入院を余儀無くされ、私も病人の世話の為、仕事を辞めねばならなくなって、病人や子供達に栄養のある物を食べさせたくて、田舎の方へ電車に乗り買い出しに行き、野菜等を買う。でも、買い出しに出掛けたものの、家路に着く迄空襲にならない様にと祈りながら電車に乗る。すると空襲警報が鳴り出し、電車は止まり、動く事も出来ず、陽は暮れかかり、何とか電車から降り、裏通りを走り帰宅してみると、私の家に焼夷弾落下の報せを聞く。町の人、在郷軍人の人達が玄関から裏の庭先までバケツリレーで水をかけ、火を消していました。子供達は焼け残った家の隅で小さくなって泣いておりました。こんな時、親が不在でどれ程つらかったらうと後悔した次第です。

戦争はまだまだ激しくなり、B29（米国の）が昼夜問わず飛び、竹槍を磨いたり、水を掛ける訓練をしていたけれど、何の役にも立ちませんでした。昭和二十年六月の末には下関の町半分は空襲で焼けてしまいました。主人も病院が焼けてしまって居るところがなくなり、帰宅する。その翌晩、再び大空襲で町全部焼け野原になりました。空襲が解除になっても、いつ又警報が発令されるかわかりません。子供を背中から下ろし汗をふいてやっていたら、

裏の方で「パチパチ」何か燃えている音がし、又、子供をおぶって逃げる準備をしている時に外で誰かが大声で「早く逃げんと焼け死ぬぞ！」と叫んでいる。外は暗闇ではあるし、右や左へと走って行く人ばかり。みんなて手をつないで逃げる途中、焼夷弾が息子の足元に落ちてきて息子は卒倒する。その息子を横抱きにして、右へ行こうか左へ行こうか。焼夷弾の落下後、水道管が破裂して水が吹き出していたので、子供達に吞ます。正気を取り戻した息子達を励まし、燃えている学校を見ながら、畑の中や軍隊の人達が入っていた防空壕へと逃げる。山の上の穴の中から町全体が焼けて灰になっていくのをずっとみていました。どの人も皆、今夜から帰る所、寝る所がない。誰もが心配していると「文閲学校へ行く様に」と言われる。

一夜明けて近所の人々と再会し、「助かって良かったね」と喜ぶ。軍からさつま芋（冷凍）一つ、かんばん一袋もらう。何処へ逃げてでも安全な場所はない、逃げることはかりしていると「私達一家全員、次々と死んでいくかもしれない」と思い、焼け跡の市役所へ行き離町証明書をもらい、私の実家・香川県へ帰ろうと決める。友人達と泣く泣く別かれる。黒焦げになって死んでいる人達を見ながら、私達親子五人、駅へ着く。駅へ着いても汽車はいつ出発するのやら……。私の家の焼け跡からやかんとごはん蒸しを持ち出すことが出来たので、それらを持って汽車に乗りこむ。汽車が駅に着く度に、誰かがそのやかんに満杯の水を汲んできて一口ずつ……。次から次へと呑み、どの渴きを癒やし、やかんの有難さが身に沁みただけです。

三日後、何とか私の郷里に着く。主人の病が少しでも良くなる迄置いてもらうつもりだったが、父の弟が朝鮮より六人家族で引き上げて帰って来ていて、主人の実家が愛媛県の松山であるため「松山へ帰れ」といわれる。昭和二十年七月、松山へ帰る。松山へ帰った晩、松山大空襲で沢山の焼夷弾が落とされた。主人の家は何とか人の手を借りて消し止めた。朝起きて家の回りの焼夷弾の数を数えたら、四十七本ありました。そして八月十五日終戦を迎える。私は今年八十九歳 松山在住。



軍直営の慰安所規定、
裏町には私設慰安所も

- 兵站軍司令部の定めた慰安所の規定は、次のとおりです。
- 1 慰安所外出証を所持すること
 - 2 入場券は下士官、兵、軍属は二円とする
 - 3 入場券に指定された部屋に入る
 - 4 但し時間は三十分とする
 - 5 用済みの際は直ちに退去すること
- 軍直営の慰安所にあきたりない兵隊は、裏町の私設慰安所を訪れます。



不潔に満ちた、あばら家の路地には、戦争で生きるすべを失った女性たちが、子どもたちや家族を養うために、日本軍相手に売春している。

私の青春

富田林市 八木美詩子

大正十五年一月、大阪市内で生れる。昭和七年、小学校入学。昭和十八年、女学校を卒業し保母として大阪市立生魂託児所勤務。昭和二十年三月、大阪空襲により焼失。八月、終戦。

その間約十三年間、昭和十二年七月、日中事変発生より終戦まで、約九年の長い間日本は大きい大きい戦争をしました。旧満州国、中国大陸、ビルマ方面、南洋諸島の島々、北はアツツ島の玉砕と、ジャングルの中に、海の底に、三百万人の日本人が死にました。中学生の可愛い青年も戦死したので。内地では小学生は田舎のお寺に疎開し、中学生も女学生も軍需工場で働き、空地は畑に、防空壕が家庭の庭や道の各地に掘られ、通行途中空襲警報が鳴ればすぐに避難しました。直撃弾に焼夷弾に機銃掃射に、本当に明日の命も分からない日々でした。物資の不足は十年以上もつづき、国民は空腹であっても誰一人文句もいわずに勝つまではと日々くらしていました。女学校三年生の英語の先生が黒板一杯に世界地図を書かれ、日本とアメリカが戦争はしてはいけないと強く話されました。間もなく召集令状が先生に来て、満州国で戦死されたと昭和二十七年に知らされました。それも終戦八日前後とさき、黒板の先生を今もはつきり覚えています。

国語の時間に歌を作りました。三年生の時に
戦線の勇士に劣らじ日の本の
銃後を守る大和なでしこ
慰問袋に千人針を入れて南支方面に送ったこともあり、返事をいたゞいたこともあります。海に囲まれた日本は、空中戦により船は沈められ、食料は農業、漁業にしか頼りません。「お百姓さんありがとう」と託児所で子供達と

歌ったこともありました。
歌ったことありません。
少しくらい不自由な生活でいい、平和な日本で暮らせたら感謝して、欲ばりはほどほどにして、人間として自分らしく一生を悔いない人生を送ることが大切だと思います。戦争は二度としてはいけない事です。

自由のない不気味な時代

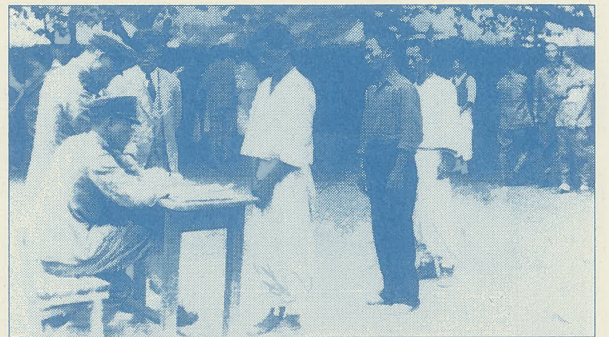
泉佐野市 大久保富子

おかげ様で七十五歳まで生きさせてもらった私は、貝塚市の実家のお墓参りをする度に、尊い命をお国に捧げた同級生方のお墓に万感の思いをこめて額づきます。

戦艦大和と共に散華した従弟の言葉「牛より苛酷な労働だよ。親には心配するから絶対に言わないけど」。彼は少年志願兵。高邁な理想と理不尽な現実とのギャップに純粹な心をどれだけ痛めた事であろうか。

私は昭和二十年四月三日、縁あって結婚したが、夫は輸送船に乗船中の海軍予備中尉であった。四月末、夫は七尾から出航する事となったが、彼は敗戦の色濃い事を既に承知していた。三回も船が遭難し、沈む船、機銃掃射、地獄の如き苦しみを受けながらあまり語らなかつた。

私共は当時岸和田市に住んでいた。B29の編隊は毎日の様に葛城の山なみの上を通り過ぎた。対岸の神戸、明石の空襲は夜空を花火の様に感じた事もある、申訳ない自分であった。七尾まで夫に重要物を届けに行った帰りに、大阪の大空襲で梅田周辺は手のつけ様がなく、京都駅で全員下車。どうして岸和田まで帰っていたのか記憶が定かではないが、難波駅の南海電車乗場への階段は青天井で爆撃のすごさを肌で感じた。南海電車から見た大阪は、土蔵だけがそこに残っているだけで全くの廃虚そのまま。出航した夫は二時間余りで船が機雷にかかり沈んでしまった。一万トン以



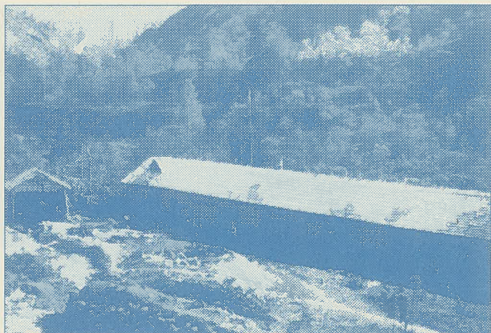
六年間に一五〇万人も
強制連行

朝鮮人の強制連行は、日本の国策で一九三九年(昭和十四)から始まり、各地の労務報国会が労務動員計画をすすめる形で実施された。強制連行者約一五〇万人を、日本人職員一万人が引率した。戦争末期には朝鮮の全羅道を重点に朝鮮人狩りをしてノルマを達成した。

日本渡航朝鮮人徴用労働者数

年次	合計	炭坑	金属山	土建業	工場を含む諸産業
1939	38,700	24,279	5,042	9,379
1940	54,944	35,431	8,069	9,898	1,546
1941	53,492	32,099	8,988	9,540	2,865
1942	112,007	74,576	9,483	14,848	13,100
1943	122,237	65,208	13,660	28,280	15,089
1944	280,304	85,953	30,507	33,382	130,462
1945*	6,000	1,000	2,000	3,000
1939~45	667,634	318,546	75,749	107,327	116,062

(注)*印は1945年4月より6月まで集計 出所=厚生省労働局



強制連行者宿舍窓にはタルキが打たれ逃亡を防いでいた

上の船であったのに。幸い、いか釣舟に救助して戴き、お寺でお世話になっているとの報が届いた。一週間後、夫は無事に帰宅したが、その肌着には虱が縫目に列をなしていた。貴重な肌着を熱湯で洗い、再度使用した。一度海に浸った皮靴は何回洗っても塩を噴いたがこれも物資不足の折から貴重な履物となった。

その頃、グラマン戦闘機が岸和田や泉南一帯に出没し、機銃掃射を受ける被害が出たが、当時は言論の自由がなく無気味な時代であった。斎藤隆夫代議士や中野正剛という憂国の士など何ものをも恐れぬ立派な方もあったが、殆どの人は時の流れに身をまかせ、我が身我が家を守るのが精一杯の時代であった。

夫は終戦後V三号と云う復員船に乗船命令があり、二年あまり乗船したが、色々な無理、ストレスのせいか肺結核となり、一年半の療養生活をする身となった。ストマイなどの高価な新薬は一切使用せず、米ぬかを食べ小鯛を食べ、自ら作った新鮮な野菜を食べ、適当な散歩と安静（これは京都大学岩井博士の教えのままに）。すばらしい先生との出会いのおかげで手術もせずによくならせていただきました。その後、国家公務員として六十五歳の定年まで無事に務めさせていただきました。只今は大自然に包まれて平凡な老後を過しています。八十四歳です。

誰が考えても戦争は嫌です。国と国との境がなく、地球には世界連邦という一つの国があるだけと云う世の中を私は願っています。

銃後の少国民

八尾市 中田 洋子

私の父は昭和十六年八月四日に出征しました。その時私は小学二年生でした。四人姉弟の長女で、弟は二歳でした。まだ薄暗い中、近所の人、親戚の

人と一緒に妹と手をつないで、駅まで父を見送りました。その年の十二月八日、太平洋戦争が始まりました。「戦争が始まった」と母が悲鳴に近い声で叫んだのを今でもはっきり覚えています。今考えると父の出征後、戦争だけは起ってほしくないと切実に願っていたと思います。

出征軍人が出た時は、私達小学生は道端に並んで日の丸の小旗を振って、「万歳万歳」と見送りました。又、白木の箱に入って帰られた兵隊さんの悲しい出迎えにも行きました。食料品を始め、あらゆる物資が不足し、衣料品も各家庭に少しずつしか配給されません。下着や靴下はつぎを当てて使用しました。戦争が激しくなるにつれて敵機による空襲が始まり、大阪等の大都市が狙われましたが、奈良県の小さな町（今は橿原市）でも朝に夜にB29が何機も何機も編隊を組んで頭の上を通ります。警戒警報が出ると授業中でも各地区毎にかたまって家へ帰り、空襲警報のサイレンが鳴ると皆防空壕に入ります。夜中でもサイレンが鳴ると防空壕に入りました。空襲で夜外へ出ると西の空が真赤に染まっている時には「アー大阪が燃えている」と皆で眺めていました。

戦争が終る頃の少しの間だったと思いますが、小学五年生の私達も兵隊さんの軍服のボタン付けをしました。一束になって持って来られた軍服の糸くずを切って、教えられた様にボタンを付けるのです。私達は銃後の少国民と呼ばれお国の為につくさなければならぬ、戦争に勝つ為に頑張らなければならない、天皇陛下の為に命を捧げなければならないという風潮の中で育ちました。国民全体が洗脳されていたと思います。教室には「撃ちてしまん」「ほしがりません勝つ迄は」の標語がはられていました。

二十年八月十五日正午に重大なお話があるのでラジオを聞く様に言われましたが、雑音が入ってはつきり聞こえませんでした。玉音の放送が有って、とに角戦争が終ったのです。アメリカ人が入って来て皆殺しにされるといふ噂が流れて不安な気持ちでしたが、その夜からピタリと空襲がなくなり、ゆっくり眠られる様になりました。徐々に町に復員軍人の姿が見られる様になり、十月の末になって父が（朝鮮の京城ソウルから）復員して来たのです。その時の嬉しさは言葉では言い表せない位でした。沢山の兵隊さんが中国大陸



舞鶴山のⅡ号舎（左・皇后用）とⅠ号舎（右・天皇用）

幻の大本営（天皇疎開の計画）

戦争末期の一九四四年、南方の軍事拠点を次々と失った日本軍首脳部は、戦いの場を本土へと移し、「本土決戦」によって戦いを続けようとした。

そこで作戦指揮の最高司令部である「大本営」はじめ、政府、NHKなど国家の主な機関を天皇とともに東京から長野県松代へ退避させることを計画した。工事は十二月十一日午前十一時を期して始められ、翌四十五年八月十五日の敗戦まで九カ月間続いた。工事はほぼ八割まで完成していた。

こうして松代大本営は、実際には「使用」されることなく「幻の大本営」となったのだ。

朝鮮人労働者七千人に強制労働

松代大本営工事には、少なくとも七千人の朝鮮人が動員された。朝鮮人労働者は穴の最先端の最も危険な現場で働かされ、ケガ人や死者が続出した。飯場に建てられた三百四棟の粗末な三角兵舎のバラックに押し込まれ、厳重に監視されていた。

食事はコーリヤンと豆のご飯に塩をかけただけ、こんな食事でも一日十二時間ずつ、二交替で働かされた。空腹や栄養失調で死んだり病気になる者があつたを断たなかった。

崔さんは「自由がなかった。歌もうたえない。朝鮮語も話せない」と監視の厳しさを証言している。そして逃亡を企てる者には厳しい制裁が待っていた。



強制連行者を移送するトラック

で、南方諸島で戦死されたのに、私達は本当に幸せでした。しかし母の弟で私の叔父も二十八歳の若さでビルマで戦死しました。

戦後の物資不足で不自由な生活が続きましたが、皆、一生懸命助け合って生きて来ました。食料不足の中で子供時代を過した私は、今の若い人の様に食べ物を残す事が出来ません。あの頃の事を考えると世の中に物があふれ、ほしい物が手に入る今の生活は本当に夢の様だと思えます。

戦争というのは、戦う軍人だけでなく、家に残る女や子供達にも大きな不幸をもたらすもので、これからも絶対してはならないと思います。今のこの平和が、いつ迄も続きます様にと願うものです。

軍国主義一色の女学校時代

東大阪市 佐々木泰子

思い出しても恐しい戦争。今、ユーゴで民族闘争や空爆で多くの難民が発生しているのをニュースや新聞で知り、戦争が家族や親族を引き裂き多くの人に悲しみや苦しみを深めさせています。

私も、国民学校と呼ばれていた頃の四年生の時、父も赤紙が来て満州へ出征して行きました。そして戦争が激しくなった頃、母の弟（叔父）も出征しました。叔父は二十一歳の時、人間魚雷にのり、戦死なさいました。祖母から聞いた話ですが、人間魚雷とは一人のりの船に爆弾を抱えて自爆する事でした。本当に残酷な事です。母も私達妹弟のため大変苦労しました。食べる物も衣料も配給で、母の着物一枚二枚と生活や食べる物に変わってしまいました。空地に小さな畑を作りいもや野菜を作りました。そしていもづるは雑炊に入れて食べました。女学校に入ってから低学年は動員で男手のない農家の畑の草取りや稲刈りにかりだされました。でも、仕事が終わって農家の人に真白いオニギリを頂いて食べた時は、本当に疲れも忘れるほど嬉しかった

事が今も思い出されます。学校でも体育の時間は雑刀の練習、体力をつけるためとか週に一回は二条城のお堀を一周させられました。先生の言葉はどんな事でも正しいと教えられ、軍国主義一色でした。

本土空爆が始まった頃、私は京都に住んで居ましたので、空襲にはあいませんでしたが、大阪方向にB29がとんで行くのを見る様になりました。ある日の夜、空襲警報が鳴り防空壕のそばで空を見上げるとB29が編隊をくんで大阪方向に飛んでいました。しばらくすると空が真赤になりドンドウと音が聞こえて来ました。それは大阪大空襲でした。その空襲で服部に住んで居た叔母夫婦と子供が直撃弾を受け三人共死亡しました。終戦になった時は心の中は悲しみとうれしさが入りまじった感じで一杯でした。幸せな事は、父が敗戦の五カ月前に満州から朝鮮に移動して居て、シベリヤに行く事なく無事帰還出来た事です。この様な不幸をもたらす戦争が起きない、平和な生活がいつまでも続く事を心から祈っております。

亡き母の戦争体験

羽曳野市 宮本 良枝

今、ボスニア紛争で大勢の難民が国境へのがれているテレビを見るにつけ、あのいまわしい戦争中の日々を思い出します。

思えば五十有余年前、この大阪もB29の空襲を連夜の様に受け、女・子供は逃げ廻った日々でした。その頃私の実家は大阪の港区夕風橋にありました。私は既に結婚して朝鮮（今の韓国）に居りましたので、終戦後夫の戦死、引揚げ等々で大変な苦労をしました。

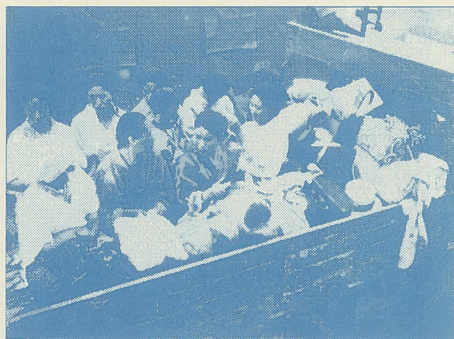
さて、戦争が終わって次第に世の中が落ち着きだした頃母はポツポツ戦時中の苦労を話してくれました。一番困った事は食べ物が次第になくなってゆく事…。時々配給だけでは足らなくて買出しに行ったそうです。まだ電車は動いてい



日本兵士が撮影した
南京大虐殺

北京郊外の盧溝橋でとどろいた銃声を合図に、日本軍が宣戦布告せず中国侵略を始めたのは一九三七年（昭和十二）七月七日。第二次上海攻防戦から約四カ月、大損害を出し補給を終わつた日本軍は十二月一日、三方向から古都・南京攻略を始めた。十二月十二日の夜、中国の首都南京は、日本軍の攻撃で中国軍は先を争って逃げた。そのとき、無防備都市、南京城の内外には、市民約一〇〇万人のうち、居残った人と戦禍を逃れてきた人約四五万人以上、それに武装を捨てた中国軍兵士たちがいた。この無抵抗の都市に、日本軍が侵入したのである。

中国側の発表では、虐殺は三五〇万人だったという。紀卍字会南京分会が埋葬した四三〇七一体、慈善団体の崇善堂の四つの埋葬隊一・二、二・六七体、計一五五、〇〇〇人以上。これに日本軍が焼却、長江に投げ捨てた数が十九万人、で合計三五万人という。



戦地での移動は、多くは無蓋のトラックで、荷物同様に運ばれる有様でした

たので、近所の人達と一緒に、食べられるものなら何でも農家へ行くので
す。そしてやっと野菜や少しのお米も買って、やれ嬉しやと急いで帰る途中、
警察に見つかってお米は一合も残さず取り上げられたそうです。今思うとあ
のお米は何所へいったのだろうか？……と。

「欲しがりません、勝つまでは」の標語はお腹の空いた人達には何の役に
もたしません。白い温い御飯を夢に見ながら、戦争の終るのをじっと待つし
かない私達だったと言います。

兄弟三人出征中の実家は、足の悪い父と中学生の末弟と母の三人でした。
三人の食物をとその日も近所の奥さん達と近くにある捕虜収容所に行ったそ
うです。アメリカの捕虜達が船から荷揚げの仕事をしています。母達は土手
の下の草むらでしゃがんで待っている、日本兵の監視の眼を盗んで土手
上から荷揚げの袋を落してくれるのです。その袋の中はトウモロコシだっ
たり、牛馬の餌のフスマだったり……それでも皆喜んで分け合って持って帰る
のだそうです。一日中待ってもきびしく落して貰えない日もあって、仕方
なく野草を摘んで帰ったとか。あの時の捕虜達の心の優しさを思い出すと云っ
て母は泣きました。

そして、あの三月の大空襲……。実家ももちろん跡形も無く焼け、防空壕
に入れてあった有田焼きの大皿だけが今も我が家の家宝のように残っていま
す。その時の空襲で母も顔中火傷をしました。首から上をぐるぐる巻きに包
帯をされて……その包帯のおかげで汽車にもすぐ乗せて貰えて疎開が出来た
と笑っていました。疎開先は母の親類先だったのですが、やはり針の筵だっ
たとか。そして八月十五日が来ました。天皇陛下のラジオ放送、即ち玉音放
送がありました。ただしはつきり聞きとれず、半信半疑で終戦を知ったと言っ
ておりました。敗戦であったのに嬉しくて万歳万歳と叫んだと云います。出
征中の子供達が無事に帰ってくるように祈りながら、ただし一人はすでに戦
死していたのですが……。ただ明日からは何をしゃべっても何を話しても良
いと云う事で、胸の痞が軽くなったと云っていました。

今、日本は不景気とはいいながら平和な毎日です。食べる物も豊富です。
戦時中つらい毎日を涙ながらに堪えた母も百歳の天寿を全うして昨年は七回

忌でした。

追記

明治、大正、昭和、平成と生きた母の生涯はまさに歴史の一頁と云えます。
この母の話を少しでも理解して頂ける方々がいらっしやる事を信じ、あえて
応募させて頂きました。

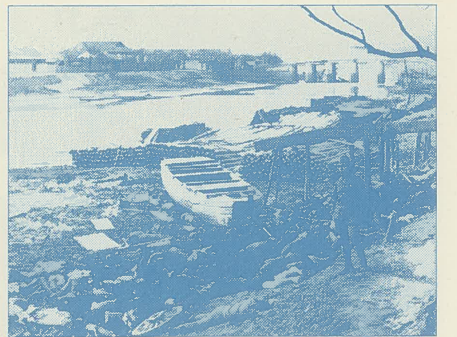
なにとぞ世界中の人々が戦争に反対して下さいる事を祈ります。

小学生でさえ戦争に巻き込まれる

堺市 露口 郁子

昭和二十年、終戦。この時私はまだ小学五年生でした。当時、香川県大川
郡津田町という海沿いの祖父の家に住んでいました。小学校へ入学した時は
まだ普通の生活だったように思います。小学三年生くらいになると戦争が激
しくなってきたようで、私たち小学生の生活もだんだん厳しくなっていま
した。とにかく物が不足し始めたのです。教科書は新しいものなど無くなり、
全部姉からのおさがりになりました。ノートも無くなり古いポスターや用済
の紙の裏を切ってノート代わりに使うようになりました。自分たちで切って
作ったのです。

学校での勉強もだんだん「戦争のため」になってきていて「戦争に勝つま
では」というのが合言葉になりました。もちろん当時の私は、日本は絶対に
勝つと信じていたのです。そんなふうには教えられていたのです。教科書の中
の文字でアメリカから来た言葉は墨で塗りつぶしました。そんな教科書を使っ
ていたのです。「勝つために」のもと何でもしました。村の鎮守様に必勝祈
願のために夜間行軍にも行きました。必勝のハチマキをして行きました。山
に草刈りにも行きました。戦地の馬の食べる牧草刈りだったのです。朝、山
へ登り夕暮れに草を背負って学校へ帰り、収穫を先生に見てもらおうのです。



揚子江岸での大虐殺

埼玉の村瀬守保さんの、
この目で見た証言

取材 日本機関紙協会

私は当時、東京目黒黒輦重連隊
兵站自動車第十七中隊に所属し、
上海と南京で物資補給のトラッ
ク運転をしていました。南京占
領後、私たち輸送部隊は、十日
ほどたって入城しました。小隊
長の乗用車の運転をしながら、
そのとき私は部隊の記録用にカ
メラ担当もしていました。写真
が好きで、現像機一式を車に積
んで、将校や兵隊の写真を撮っ
たりもし、特権的に撮影できた
のです。

撮った写真は、ネガと一緒に
郷里に送り今も残っています。

第一線部隊なので、検閲はう
るさくなかったようです。

ある日、荷物受領に、揚子江
西の下関に行きました。広い海
岸が死体でいっぱい埋まっ
ており、軍服を着た死体はほ
んどなく、工兵隊が死体を沖に
運んで流す作業をしていました。
戦争展に、この写真を提供しま
す。

カメラは、ローライコードと
ベビーパールの二台を使いまし
た。



捕虜の生き埋め作業

先生の言うことは絶対で決して逆らえませんでした。終戦が近づくと、校庭に畑を作ってさつまいもなど食料になるものを植えました。勉強なんてちつともしないで戦争に勝つためばかりの行事。私はそれでも「勝つ」と信じていたのです。上の姉は大阪大正区で、下の姉は学徒動員で行っていた高松でそれぞれ空襲に会いました。姉妹はバラバラになっていたのです。二人の姉が津田町に戻ってくるまでは不安な日々でした。

祖父の家には疎開してくる人が増え（縁故疎開）、多い時には二十人以上の人が住んでいました。当然食糧不足。田舎といっても農家ではなかったのでも米なんてほとんどありません。麦めし、ぞうすい、すいとんなど、家の庭にも野菜を作っていました。トマトなどは実るのが待ちどろしくして少し緑だけれど食べたこともあります。各家には防火水槽や竹やりがありました。竹やりは敵が来たら自分を守るもの。そのために町内で訓練がありました。「千人針」もしました。小さいながらも兵隊さんのためにしたいと思っていたのです。小学生でさえ知らないうちに戦争に巻き込まれていたのです。そんな時代だったのです。

戦争は何一つ残りません。今でも世界のあちらこちらで戦争があります。他人事とは思えません。世界中が平和になるのを願っています。

戦争の実相

堺市 齊藤 蕃

戦争の体験談をと言われ、戦争のない平和な世界を望む意味からも、当時を思いだしながら綴ってみた。私は、ソ・満・朝の国境で戦ったが、今も鮮明に残っている幾つかの例を挙げてみる。

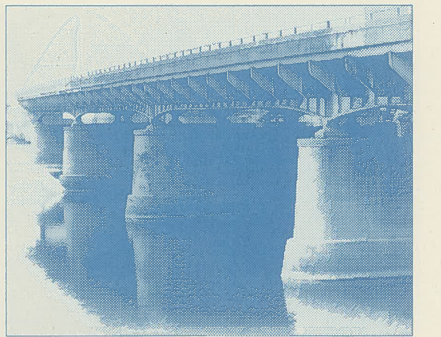
一九四五年八月九日未明、寝ているところを起こされた。ソ連軍侵攻。前線部隊の砲撃が絶え間なく聞こえる。土足のままで兵舎の中はごった返し、

この部隊は掻き集めの混成の野砲隊。私は、最近転属して来たばかりの弱兵で、この部隊のことは何も知らない。只、判ったことは四、五日交代で兵隊が入れ替わり、たち替りで陣地構築をしているということ。医務室預かりとあって、私を含めて五名の兵隊は体の療養に専念していた。

夕方、「今から汽車に乗る」とのこと。陣春駅へ何人かの重症患者と一緒に行く。駅前の広場は開拓団の人でいっぱい。無蓋の貨車に乗る。朝鮮向けの最終列車。将校が「兵隊以外はひとりも乗せるな」と怒鳴っていた。広場の人々はどうなるのか心配だった。四つ目の駅で引率者と我々五名が降りる。すっかり暗くなった山道を一時間程歩いて、陣地へ着く。大きなテントの明かりが見えた。中で幹部連中がドンチャン騒ぎ、兵隊は蝸壺の廻りで横になっている。

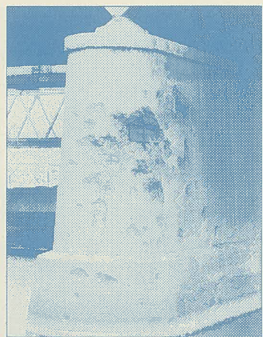
翌朝、廻りをみると灌木の多い、砲声以外何の音も聞えない山の中。私は無線手だったが無線機はなく、することがない。昼近く、前線から着のみのまま六名の兵隊が逃げて来た。砲は破壊され、仲間は殺され、傷だらけの体で帰ってきたと隊長に報告していた。昼過ぎ、「対戦車肉迫攻撃」に行くようにと命令が出た。アンパンと称する円盤を棒の先にくくりつけて、戦車のキャタビラめがけて突っ込めという。特攻隊だね。十二名で出かけた。陣地から遠回りして谷間に出た。三十メートル上は陣地。蝸壺は地盤が固く掘れない。やむを得ず石ころを集めて遮蔽地を築く。こんな谷間に敵の戦車が入ってくるだろうか。ところが来ました。二百メートル位の処まで入ってきて、戦車砲と機銃で撃ってきた。ヒューン、ヒューンは恐くはないが、プスッ、プスッは近いのでゾツとする。ソ連の戦車の大きいのは驚いた。ドイツが降伏して間もない。全軍、ソ満国境に集中していた。負け戦だ、ここで死ぬのかと覚悟を決めた。戦車は谷間に入ってきたり、出ていったりの繰り返し、敵は谷間の奥にどんな仕掛けがあるのかと用心ぶかい。夕方になり薄暗くなってきた。敵戦車は引き上げていった。やれやれと胸を撫でおろす。近くの草ぶきのバラックで休む。静まりかえった夜空にいっぱい星、故郷を想いだす。

朝方、上の陣地でドンパチが始まった。十人に一丁の銃、どのように戦っ



長柄大橋に
一トン爆弾直撃

昭和二十年六月七日の、昼間の大空襲はものすごかった。大阪西部の大工場地帯は、爆撃でこっぴどんに砕けちった。市内もまた猛煙につつまれた。



長柄大橋には、B29の精密爆撃によって一トン爆弾が何十発も落とされ、橋の下の遊歩道に避難していた人々は、一瞬のうちには百数十人が即死した。その場を見た小森孝児氏（戦争展事務局長代理）は「…何十体もの死体と一面、血の海で、橋桁や石垣にはちぎれた手足や、肉片がへばりつく地獄図に、思わず体がふるえました」と話している。

ているんだろうか、四、五十分で静かになった。間もなく伝令がきた。すぐ引き上げて「戦場整理せよ」と隊長の命令。崖をよじ上って見た光景は、死骸がごろごろ四十人程。ソ連兵はたったひとり。そばに自動小銃が落ちていた。負傷兵はつれて行ったのだろう。わが友、宇田川くんが顔の半分を吹き飛ばされて死んでいた。軍曹が死人の階級、名前をメモしていて、我々にいそいで本隊に合流するように指示したので、負傷兵二人を担架のせて山を降りた。途中二人とも息たえたので、穴を掘り埋めて冥福を祈った。

本隊に追いついたが、蛸壺も掘らずに三三五五、集まっていた。負傷兵がだいぶでたらしい。隊長は戦いの最中には居なかったとか。その隊長が我々に二度目の「対戦車肉迫攻撃」に行けと言う。丁度昼飯どき、雑囊を取りに行こうとしたとき「死に行くのになにがいるんだ」「飯は後で届ける、すぐ行け」。雑囊には靴下一足、片方に米が七合、他に牛肉の缶詰め、乾パン三袋入れているのだが取りに行くのを諦めた。

二時間程歩いてなだらかな丘の斜面に出た。木は一本もない。敵戦車の通り道になりそうな場所だ。各自決められた場所に蛸壺を掘り夜となった。空いっぱい星を眺めながら寝てしまった。夜中に目をさました。ひっきりなしに聞こえていた砲声が止んでいた、静かだ。これが戦場だとは、一時忘れてしまった。腹がへった、昼・夜、二食食べていない。夜が明けた。二人の兵隊を本隊に行かせて飯を持ってくるようにたのんだ。昼近くになって遠くの山の稜線に二人の姿が見えた。だが、手には何も無い様子。がっかり。本隊にはひとりもいない、灌木に馬が二頭繋がれていて可愛想なので放して来たそうだ。我々にまる一日飯も与えず逃げた隊長。これが日本の軍人の本質なのだ、相談の結果、朝鮮方面めがけて歩き出した。まもなくトラックの音が聞こえ、敵か味方か木陰に隠れてみていたら味方のトラックだった。止めたところ将校が乗っていた。荷台には負傷兵が立っただけで、菊川君は「斉藤やられたよ」「菊川がんばれよ、死ぬなよ」と私。「この先にミッコートンという部落があるから、そこへ集結せよ。ソ連とは停戦協定が結ばれたから……以前のノモンハン、チョウホウ事件と同じように考え、部落へ着いた。師団長は割腹自殺。我々はソ連兵の監視のもとにおかれ、次の日か

ら毎日、二、三十キロの行軍。遂にシベリヤ行き、敗戦を知ったのは九月十日、東満の蒼縣収容所、森林地帯の中だった。

今、国会で論争しているガイドライン、アメリカの戦争に手をかすのが目的で、後方支援とは言いが、前線も後方もないのが戦争だ。戦争で儲かるのは兵器工場、即ち財閥で、戦争に駆り出されひどいめにあうのは庶民の我々なのだ。日本は世界第二の軍事大国。兵器はつくらず、売らず、買わず、の世の中になることを願っている。

終戦記念日に思う

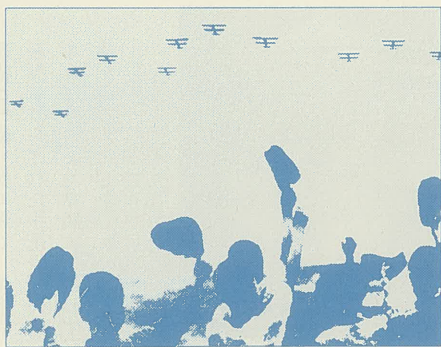
京都府綾部市在住 大槻 政野

昭和十七年から二十二年春まで小学校に勤めて、激動の時代を過ごしましたが、聖職を誇りとして、次の世代を背負ってくれる学童の教育の道に入りましたが、責務の重さを感じた数年でもありました。

忘れもしません、あの戦争の激しくなった昭和二十年三月三十日、京都市中京区の日彰国民学校（現日彰小学校）から学童疎開として、三年生から六年生まで百三十人の学童と教職員十三人が、以久田国民学校（現豊里小学校）にみえた日のことを。

村長さんをはじめ役場の職員、学校職員、学童の代表が位田橋まで出迎えるに行きました。胸には血液型を書いた布を縫いつけ、防空頭巾を肩にかけたあどけない子どもたちの姿に胸が熱くなりました。この疎開は子どもたちの命を守るため、強制疎開の名のもとに都会から田舎の学校へと全国的に学童疎開が実施されたのです。

以久田村も村民あげて受け入れをしました。位田の浄泉寺、栗の高台寺、大島の瑠璃寺と三カ所のお寺に分かれて寮生活を始めたのです。校長先生を先頭に、乾布摩擦やみぞれ降る中での早朝マラソンで、手も足も凍えて教室

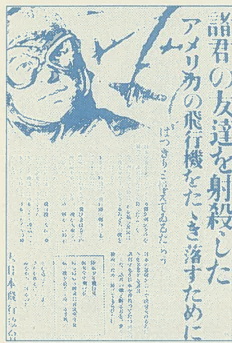


少年よ行け、
大空へ祖国のために

月赤い血潮の 予科練の
七つボタンは 桜に錨

太平洋戦争もたけなわの一九四三年（昭和18）「若鷲の歌」が大流行した。この「予科練の歌」が歌われ、予科練の募集が大々的に行なわれた。戦争が広がるにつれ陸海軍は、下士官の大量養成を目的として少年兵を増やしていった。

少年兵の人気は次第に大きくなる。学校や市町村役場でも、少年志願兵の応募を積極的にする。最後には志願年令が満十四歳に下げられ、学科試験はなく体格検査だけになったので、応募者は急増した。



諸君の友達を射殺した
アメリカの飛行機をたゞ落すために

'99 夏の班長会・班会 お店組合員のつどい 平和学習資料



その時はもうおそすぎた

ナチスが共産主義者を攻撃したとき、自分はすこし不安だったが、とにかく自分は共産主義者でなかった。だから何も行動にでなかった。つぎにナチスは社会主義者を攻撃した。自分はさらに不安をましたが、社会主義者ではなかったから何も行動にでなかった。それからナチスは、学校・新聞・ユダヤ人などを次々攻撃し、自分はそのたびごとに、いつそう不安をましたがそれでもなお行動にでることはなかった。それからナチスは、教会を攻撃した。自分は牧師であつた。だから立つて行動にでたが、その時はもうおそすぎた……

マルチン・ニーメラー／安藤馨著「あるキリスト者の戦争体験」

1999年東京夢の島での市民平和大行進出発集会の挨拶で日本被爆者団体協議会の藤平事務局長が紹介されました。

※写真は、NATO軍のユーゴ空爆によって破壊された家から避難する父親と娘。

に入り、薪ストーブがあるものの、寒い教室で子どもたちは我慢をして授業を受けたものです。又、校長先生を隊長に各学級は担任の先生の名で「〇〇小隊」として子どもながらきびきびとした戦時下の強たくましい学童でした。当時は田舎も食糧不足で苦しい時でしたので「欲しがりません勝つまでは」と、地元の子も疎開の子も、学校から帰れば手伝い、宿題、いなご捕りやどんぐり拾いに野山へと行き、遊ぶことも出来ず、それはそれは耐えぬいた日々だったと思います。道路沿いに大豆を植えたり、高等科の学童は以久田野を開墾してさつまいもを植えました。また、遠方の学校林の木を伐採して炭を焼き、雪の山道を学校まで荷車で運んだ思い出もあります。父や兄を戦場へ送った家族も多く、クラスの中にもお父さんが戦死された学童もいました。B29の爆撃機も飛来します。防空頭巾をかぶり避難する場所は学校のそばの山でした。

やがて八月十五日、太平洋戦争は終結となり、米軍の進駐と同時に日本の学校教育は変わりました。今まで国をあげて頑張ってきたのは何だったのか。はりつめた心も、ぬげがらのようになりました。学童たちの心境はどんなだったのでしょうか。

戦後の混乱がおさまりにかけた十月十七日、二百余日の疎開生活もとかれて、苦しかった寮生活の思い出を抱き、なつかしい親元へ帰られました。

終戦から三十九年ぶりの昭和五十九年六月に、立派な社会人になられた当時の学童の皆さんが第二の故郷、以久田国民学校（現豊里小学校）を訪ねて下さいました。戦時中、以久田村で生活したことを忘れないように、また、平和の貴さを今の子どもたちに知ってもらうためにと豊里小学校の中庭と宿泊所になっていた三カ所のお寺に記念碑「学童疎開之碑」が建てられました。当時を思いおこし、参列者一同涙にむせびました。

もう二度とあのような悲しくつらい思いはしたくありません。子どもたちのためにも戦争を起こしてはなりません。

終戦記念日を迎える度に、改めて平和な世の中に感謝し、戦争のない平和な日が続くよう願わずにはいられません。

ご紹介しました
パネルは

- ・平和のための大阪の戦争展
- ・日本機関紙協会大阪府本部
- ・日本機関紙出版センター
- よりお借りしました。

支部・お店委員会などでレンタルご希望の方は、組織企画室
0722(32)3011まで。